

今こそ現場から地道な実践の積み重ねを

～若い先生方に伝えたいこと～

岐阜聖徳学園大学 名誉教授 成田 幸夫

この春、私は16年間の大学生活に区切りを付けました。最後に課せられた任務は教職課程の設置大学に「体制整備」と「自己点検評価」が同時に制度化される新しい局面を前に、「私学としての独自性を踏まえた妥当性の高いアセスメント・ポリシーをまとめる」という会議の座長としての仕事でした。

国が求める「自己点検・評価の義務化」や「認証評価の制度化」はこれまで果たしてどれほどの成果を上げたのでしょうか。現実には、大学教育の改善や質保証への効果の検証よりも、多くの場合、認証評価をどうクリアするかが主眼となってしまっています。加えて矢継ぎ早の制度改革やコア・カリキュラムに代表される講義内容への関与などによって縛りが強められ、結局は大学の独自性や教員の余裕をなくし、報告書作成のための仕事量を増やしただけという側面が否定できないように思います。そうした中、激論を経て、多くの大学とは異なる答申をまとめあげるには、ある種の信念と覚悟が必要でもありました。

ひるがえって、昨今の学校現場を見ると、「令和の日本型学校教育」「GIGA スクール構想」「個別最適な学びと協働的な学び」「SDGs」……おなじみの言葉に振り回され過ぎているように見えます。最近俄然強調されるようになったイエナ・プラン然り、脚光を浴びている不登校特例校の謳い文句然りです。共通しているのは、子ども自身が学習計画を立てる／図書室や職員室も含め学

校全体は子どもが過ごしやすいようデザインされている／校則や制服はなく、時間割は子どもの実情に応じて柔軟に変える／担任は子どもが指名することもできる／フレキシブルなプログラムを工夫する……これらのいったい何が新しいのでしょうか。生意気な言い方で恐縮ですが、ここで扱われている内容は、40数年前から個性化教育が目指そうとしてきた事柄と何も変わらないと断言できます。

制度や指導要領が変わるたびに、もっともらしい言葉を冠した主題を掲げて右顧左眄する愚はもういい加減によそうではありませんか。大切なのは、本気で何を目指しどういう子どもを育てようとしているのかを厳しく問うて実践を積み重ねることです。

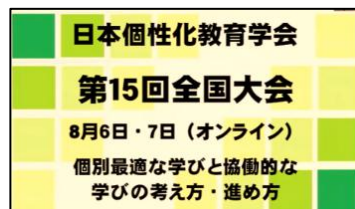
ところが、かつてと同様に、T.T. 加配が開始されれば少人数指導に注目が集まり、総合学習が制度化されれば教科横断的で解のない学びが流行するというように、風向きに敏感なスクールリーダーと与えられたパラダイムに従順な教師集団による実践という構図は、残念ながら今般も繰り返される気がしてなりません。

『仮想敵』を作らないと意欲が沸いてこない」というつまらない老兵の戯言かもしれませんが、内なる「敵」と闘う腹を据えた信念と実践へのこだわりこそ、かつての緒川小を創りあげた原動力であったことを、今こそ現場の若い先生方に伝えたいと思うこの頃です。

〈第 15 回日本個性化教育学会 全国大会〉

◇テーマ『個別最適な学びと協働的な学びの考え方・進め方』

第15回全国大会は、オンライン方式で8月6・7日、開催されました。加藤幸次会長から「皆さん、おはようございます。日本個性化教育学会の今大会には、九州から北海道まで、165名を超える方々が参加していただき、大変喜んでます。いつもは、挨拶は簡単に終わらせていますが、今日は、5月の「37号会報」に巻頭言を書かせていただきましたので、これを読み挨拶といたします。」と巻頭言を読まれ、大会の幕が開きました。



2日間での講演、対談、シンポジウムでは、各先生方から、新しい知見やこれからの指針となるご意見を頂戴しました。また、各分科会や自由研究発表でも貴重な報告や活発な質疑応答があり充実した会になりました。会員の皆様にその報告を行います。（巻頭言は日本個性化教育学会 HP に掲載）

●日 程

8月6日	9：45～10：00	開会行事
	10：00～11：10	講演：「令和の日本型学校教育と GIGA スクール構想」 板倉寛（文化庁文化経済・国際課長） 前文部科学省初等中等教育局学校デジタル化プロジェクトチームリーダー）
	11:15～12：30	対談：「多様で包摂的な教育を目指して」 松村暢隆（関西大学名誉教授） 加藤幸次（上智大学名誉教授）
	13:30～16：30	分科会1「見方・考え方を育む算数科授業の新たな展開」 コーディネータ：浦郷淳（長崎国際大学） 分科会2「はじめて取り組む自由進度学習」 コーディネータ：佐野亮子（東京学芸大学） 自由研究発表1・2
	16：45	理事会

8月7日	9：30～12：30	分科会3「若手教師のための単元づくりと学級づくり」 コーディネータ：藤本勇二（武庫川女子大学） 分科会4「中学・高校におけるカリキュラム開発の新たな展開」 コーディネータ：伊藤静香（帝京平成大学） 松倉紗野香（埼玉県立伊奈学園中学校） 自由研究発表3
	13：30～16：30	シンポジウム「子どもを主語にする学校づくり」 コーディネータ：奈須正裕（上智大学） シンポジスト： 伏木久始（信州大学） 荒田修一（富山市立堀川小） 阪本一英（奈良女子大学附属小）
	16：30～16：40	閉会行事
	16：40～17：10	会務総会

講演： 「令和の日本型学校教育と GIGA スクール構想」

板倉 寛 文化庁文化経済・国際課長

前文部科学省初等中等教育局

学校デジタル化プロジェクトチームリーダー

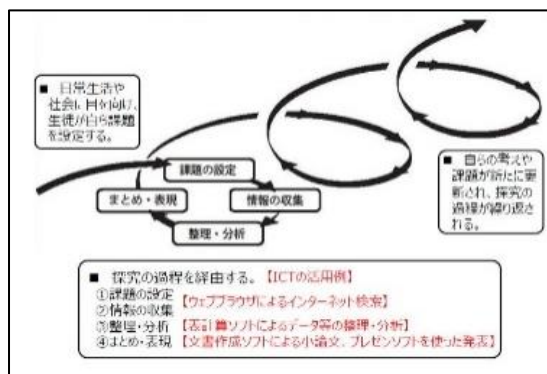
最初に、文部科学省が行っている各種調査寄り、整備段階から活用段階に入っている GIGA スクール構想の現状について明らかにした。

教職員と児童・生徒とのやりとりで週 1 回以上活用が 70% 弱、児童・生徒同士のやりとりでの活用 50% 強、児童・生徒の特性・進度に応じた活用が 40% 前後、等のデータを示した。GIGA で整備された PC は、活用は進んだがまだ十分な状況とは言えない。校務事務システムの導入は進んでいるが、クラウド化や自宅での活用が課題である。児童・生徒の活用は、セキュリティポリシーや情報モラルも課題である。ICT の活用やネットワークの整備が進まないのは、行政の力に負うところが多いと、GIGA の現状と課題を述べた。

GIGA スクール構想と学習指導要領の関係では、ICT 活用の特性・強みを生かし、主体的・対話的で深い学び、個別最適な学び及び協働的な学びに生かすという、新学習指導要領の趣旨を実現するために重要な役割を果たすとした。

1 人 1 台端末の活用事例の GIGA スクール標準仕様については、「Apple 社 クラズルーム」「Google 社 Google Classroom」「Microsoft 社 TEAMS」の 3 社の汎用ソフトで整備されていて標準や無料活用できる「画像・動画撮影編集、図形作成、ファイル共有、チャット、電子メール、ウェブ会議等」のソフトや機能で活用されている。

探究的な学習における学習の姿と ICT の活用



児童へのアンケートでは、1 人 1 台の端末の導入で、授業が、「楽しくなった」「よく分かるようになった」「自分のペースですすすめられるようになった」「友だちと協働できるようになった」等の回答が得られている。

また、校務処理に関するアンケートでは、10～30% 負担が軽減されたとした学校が多かった。

最後に、文部科学省の事業、特設ウェブサイト StuDX Style、学習指導要領コード、文部科学省 MEXCBT システム、「子供の学び応援サイト」を紹介した。2040 年頃の社会の姿を提示し、「Society5.0」「人生100年時代」「グローバル化」「人口減少」という社会で「教育 DX」がキーポイントになるとした。

(文責・東京・佐久間)

対 談：「多様で包摂的な教育を目指して

—個性化教育の歴史的展開を踏まえて—

対談者 松村暢隆（関西大学名誉教授）

加藤幸次（上智大学名誉教授）

1 個性化教育は、才能・障害のある子の

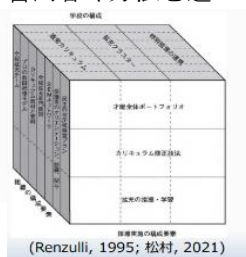
指導・支援を包摂する（松村教授）

令和3年文科省有識者会議では、才能のある子及び2Eの子（才能と障害を併せ持つ）の困難の解消を重要課題とした。学校内外での対応、不登校の解消を目指す。2E児は全体の2%とも言われる。また、障害ではなく「才能に起因する困難児」は2Eと合わせて数%（学級に1~2人）とされるが、認識は低い。

不登校の契機は才能による困難の「浮きこぼれ」が3割近くになる。才能児や2E児を特定せず、通常学級や通級指導等での個別最適な学びの中で、子どもが主体的に学習内容や方法を選ぶことが解決に近づく。

アメリカの学校ベースのSEMの理念（全校拡充モデル）が参考になる。

（全校拡充モデル）



天童市立天童中部小学校の取組に、MP（マイプラン）学習・FSP（フリースタイルプロジェクト）がある。これらは、新しい対応をしなくても、個性化教育で対応できることを示唆する。本学会と実践校による可能なアクションによって、多様で包摂的な個性化教育は「教室での個性化教育」であること、それは教師の負担増にはならないことを示し、各教育委員会との連携

を進め、誤解のない理解を広めたい。

2 「個性化教育」で救われる（加藤教授）

個別化は、日本の一斉画一授業からの「落ちこぼれ」をメインターゲットとして始まった。個人差はあるが、それを乗り越えて単元目標を達成するのが「指導の個別化」の概念である。

片方で「学習の個性化」という概念は、個性を伸ばし才能を伸ばすことを目指し、学習課題を選択し自由研究をするオープンタイムに取り組んできた。「指導の個別化・学習の個性化」でやってきた個性化教育を第一ステージとすると、今や「浮きこぼれ」を救う第二ステージに来ている。もっとインクルーシブな、もっと多様性を包摂した段階に進んでいくことが必要ではないか。

本当に才能を伸ばすには、自由な時間を与えることが大切である。週一日総合に取り組む日を作った実践校もある。学校のカリキュラムを現場で作っていく。また、学習の履歴の集積が進むと、より「個」を掌握できる。子ども一人一人を長期間、縦に捉えるシステムを構築することは、大きな授業改革になる。どこまでのスキルが付いたか、どんな分野が突出しようとしているか。あらゆる子どもたちが個性化教育で救われる。

（文責・埼玉・熊坂）



話 題 提 供 森 勇介(聖心女子学院初等部)

小野健太郎(武蔵野大学)

加固希支男(東京学芸大附属小金井小)

コーディネータ 浦郷 淳(長崎国際大学)

見方・考え方を育む算数科授業とするために教師は何を行うのか。提案を元に議論を深めた。

加固先生からは、個別最適な学びの実現のためには、算数の教科特性を生かした学習の重要性が提案された。その中では、単元構成の考え方について、「分数×分数」と「分数÷分数」を合わせた単元での授業の具体からの提案があり、個別学習の1時間のイメージや授業における教師の関わり方について深く知ることができた。

小野先生からは、オーセンティックな算数の学びを、4つのポイントとして整理されたものが提示された。特に、「フィクションの世界固有のアプローチに身を馴染ませる」について、「分割」の事例が紹介された。「条件節」と、「手続きの知識／行為節」を視点に子どもの学びの具体が示され、授業イメージをもつことができた。

森先生からは、「子どもに学びの価値や目的を開く」「安心して失敗できる学習集団をつくる」という提案が行われた。そこでは、20年来取り組まれている「見方・考え方カード」「深いイイ♡カード」が紹介された。授業中の「見方・考え方を働かせているという自覚化」「深い学びの意識化・目的化」によって、子どもの学びが豊かに変容する具体を知ることができた。

その後、参加者からの質問や相互質問をふ

まえ、議論を行った。その中では、次のような特徴的な提案が見られた。

加固先生からは、算数の授業においては、「見方・考え方を働かせる学び方を教える」こと。

小野先生からは、算数の見方・考え方は、「既に使ってきている数学的な見方・考えの質を高めていく」こと。

森先生からは「よい見方・考え方を知っておけばほとんどの問題を解決できる」こと。さらに、学習を子どもに預けることの大切さが全員から指摘された。そのための手立てとしては、子どもが思っている「数多くの問題を解く」「難しい問題を解く」といった価値観を授業の中で取り除いていくことが必要ではないかという指摘があった。

また、授業場面での教師の役割について議論を深めると、先生が逃げずに子どもに学び方を教えていくこと、学びの広げ方を共有すること、子どもに一人学びができるようにしていくことなどの意見に集約された。

問題に対して、子どもがどのような姿で乗り越えて欲しいと期待しているのか。教師がそのような具体的な子どもの姿を描くことができているのか。そのような教師の姿勢の重要性が確認された。

(文責・佐賀・浦郷)

分科会2 「はじめて取り組む自由進度学習」



話 題 提 供 市川拓美 大久保唯 依岡真吾（東浦町立緒川小）

津藤美加（山形市立第一小）

今川颯太（神石高原町立豊松小）

大西信慈 久保元城 佐々木陽平 林里紗 村上聡恵（軽井沢風越学園）

コーディネータ 佐野亮子（東京学芸大学）

本分科会は、様々な状況下で「はじめて」自由進度学習に取り組んだ4つの学校（教師）の実践に至る経緯や願い、実践開発の工夫、成果と課題等の報告を通して、自由進度学習の実践イメージやアイデアを共有し、個別最適な学びの実現への要所を考える機会となった。

最初に発表した愛知の緒川小は40年以上前から自由進度学習を行っているが、公立学校には異動があり着任したばかりの教師は誰もが「はじめての自由進度学習」となる。その視点で学習の始まりから終わりまでをQ&A方式のストーリーで解説し、実践を磨く勘所やそれらを継承していく工夫について言及した。

続いて山形の第一小は、他校で実践経験のある教師の存在が契機となり校内でスタートした。はじめての実践で一斉授業では見られない個人で探究する姿や他の授業にも学びを活かす様子が見られたという。一方で初めての学習材作成では、単学級のため担任一人では負担が大きいと感じ、担外教員の協力が必要だったこと、学習カードづくりは教材研究そのもので、発問や指示をどう表現するか悩んだことなどが語られた。

次の広島の豊松小は全児童数14名の小規模校である。「わたりの授業」で課題と感じていた学力差への対応や、自分でやり遂げる学習の楽しさを感じてほしいという願いから、自由進度学習に取り組んだ。

子どもの学習特性に応じたオーダーメイドの学習材準備には、苦労も時間も要したが、単元がはじまると、学習方法を選びながら粘



一年生算数
「かたちづくり」
豊松小の実践

り強く考え続ける子どもの様子をじっくりと見とることができたという。

最後の長野の風越学園は開校3年目の学校で、当初より異学年の自由進度学習に取り組んでいる。AIソフトや問題集による学習だけでは教科の本質にふれる深い学びに迫ることは難しいと感じ、今年度から算数・数学を担当するスタッフがチームとなり、図形領域の学習材開発をはじめた。

内容系統の吟味、T3パズルを利用した導入の工夫、日常生活から問題を見出す発展課題の考案など、まず大人が学習への固定観念や境界をつくるところから離れ、子どもが自分らしい学び方で教科を探究できる場づくりを目指したいと語った。

（文責・東京・佐野）



話 題 提 供 箱根正斉（西宮市立六甲台小）
松井香奈（大阪市立吉野小）
館岡真一（妙高市立妙高小）
コーディネータ 藤本勇二（武庫川女子大学）

本分科会では、3名の先生方から単元づくりと学級づくり、それを実現する日々の取組の実際を報告いただいた。

1. 自立した学びを支える授業づくり

松井香奈先生（大阪市立吉野小）

社会科の授業の取組を中心に報告していただいた。授業の進め方については前日までに教師と授業者グループが相談するよう自己決定の機会を設ける。その子が何を考え、どのように学ぼうとしているのかをできるかぎり見取ることによって個に応じた教師の出をつくる。授業や朝の会などでの聴く指導・話す指導を意識する。こうした授業づくりとそれを支える「子どもの安心感」や「自分の得意を生かして仲間に関わるクラス」づくりの在り方について話し合われた。

2. 学級経営と探究的な学習について

箱根正斉（西宮市立北六甲台小）

学級経営と探究的な学習のつながりについて報告いただいた。子供が学びのストーリーを創ることができるよう余白のある単元を構成する。探究的な学習の問題解決において、合意形成を図る場面を設定する。一人一人の居場所をつくるために、主体的な子供の姿を引き出すことができるよう教師の出る場面を考えて子供を支援する。そんな子供が創る探究的な学習を通して、子供同士の互いの見方や関わりが変化し、子供同士が繋がっていく姿について議論することができた。

3. 学びを繋げて生活を見つめる子供を育てる

館岡真一（妙高市立妙高小）

これまでの総合的な学習の時間を「総合する」実践について報告いただいた。実践で教師は、子供のしたいを教科の学びに高めるために、社会科と理科の単元配列の入れ替えや妙高山の教材化等を行い、妙高山と一体化したカリキュラムをつくる。これにより、子供は活動を通して本物に出会い、感性をはたらかせ、自分の体験から生まれた「もっと知りたい」を自分の興味・関心に合わせて学んでいく。こうした一つ一つの体験学習が繋がると、生活が違ってみえてくる。発表から、学習と仲間づくりの本質を共有することができた。

後半の議論では、単元づくりと学級づくりが子供の育ちの両輪であり、授業づくりの視点からは、教材研究にもとづく「物事の本質に届く問い」を見つける努力と、子供の育ちを見取る努力の重要性について議論した。子供に任せると子供を見取る時間が生まれ、子供が学びを生み、教師が深めることができると捉えることで、学習活動と一体化した学級経営が、「個別最適な学びと協働的な学びの往還」の実現につながることを確認できた。

（文責・兵庫・藤本）

分科会 4 「中学・高校におけるカリキュラム開発の新たな展開」



話 題 提 供 松倉紗野香（埼玉県立伊奈学園中）

山藤旅聞 （新渡戸文化中・高）

森美千子 （山形県立山形東高）

コーディネータ 伊藤静香 （帝京平成大学）

松倉紗野香（埼玉県立伊奈学園中）

本分科会では、中学・高校における総合的な学習（探究）の時間について、新たなカリキュラム開発に取り組む3校の実践について話題提供をいただいた。

松倉先生からは、企業と連携し、SDGsに示された社会課題について取り組む実践の発表があった。学校外の世界と関わりを持つことにより、生徒一人一人が、単なる学校の勉強としてではなく自分と社会との繋がりを強く認識できる。「サステナビリティ／持続可能な」という言葉について「自分の言葉」で表現するという活動が特に印象に残った。何か大きなことをやり遂げるといふより、社会的課題について自分ごととして捉え、追究してきた内容を自己分析することで、自分の表現となる。何よりも、そこに自主的な学びが生きている。

山藤先生の発表からは、総合的な探究の時間として全学年・教科の先生が参加する独自のカリキュラム運営をしている中で、教員間の意識や理解共有の重要性を改めて認識させられた。優れた取り組みが、大学の研究との連携についても見事に機能していることも理解できた。

「主体的な学び」という言葉のレベルで、それぞれの教員あるいは生徒が理解している教育像の定義をすることから始まる。その言葉や表現が意味する根本的な理論や概念の徹底があるからこそ、一人一人の主体性や将来の展望までを見通せる学びとその子ならではの

の学問・社会とのマッチングが可能である。

森先生の発表では、グローバル時代において山形から発信するグローカルという視点から、生徒が社会的課題を追究し、大人や、学外の人を巻き込み、また生徒自ら企業にお願いにいく、ファンディングまで行うという活動の幅広さに驚いた。

高校生という世界にしながら、地域、県、そして国、世界へと多方面に働きかけられる力、協力を得ながら、時には理解を得られず断られたり、失敗もある中で遂行する過程が全て生徒の学びとなっている。

学問とは何か。大学受験という言葉が常に背後にある高校生において、課題研究や探究活動の意味を改めて捉えることができる。

何事も、チャレンジには「壁」がつきものである。今回、先生方の発表を聞いて勇気づけられた現職の先生も多いのではと思う。生徒の自主的な学びの探究に委ね、教師はあくまでも教えすぎない、教えないというより、待つことの重要性が共通して時に教師にとってはジレンマとなることもあろう。そのような中で、こうした学びを経て卒業していく生徒がやがて高校・大学・社会に出る時にどんな将来を創り出す個人となっているか。大変興味深い。

（文責・東京・伊藤）



【自由研究発表 1】 司会：伊藤静香（帝京平成大学）・村松麻里（金沢学院大学）

- ① 伊藤静香（帝京平成大学）・浜島幸司（函館大谷短期大学）
小学校英語教育の現状と課題－教員の意識調査の結果から－
- ② 植村利英子（川崎市立橘高） 対話によって思考を深める
－英語科と総合的な探究の時間を利用した国際理解教育の事例－
- ③ 村松麻里（金沢学院大学） 英語絵本読み聞かせにおける協働的な学び
- ④ 浅沼茂（東京福祉大学） 思考力のカリキュラムの実践
- ⑤ 中島信（立命館小） 学校現場からのカリキュラム構成モデル試論
－資質・能力ベースのカリキュラム・マネジメントの「実践理論」として－

【自由研究発表 2】 司会：香田健治（関西福祉科学大学）・奥泉敦司（金沢学院大学）

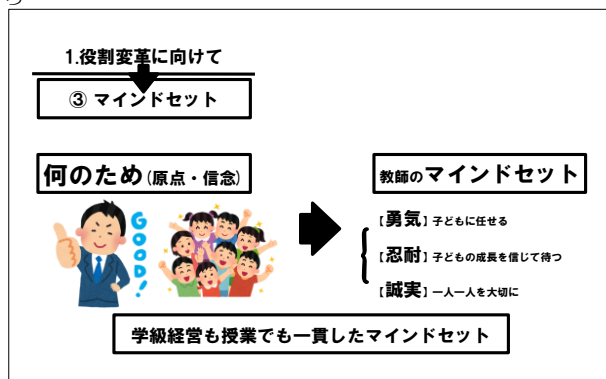
- ① 米澤利明（金沢学院大学）障害をもつ子どもの通常学級への通学ニーズに
応える「チーム学校」の運営
- ② 奥泉敦司（金沢学院大学） 保育・幼児教育における個別の幼児理解を活かした実践に関する考察
－個に応じた保育環境と保育記録を手掛かりに－
- ③ 横山みどり（筑波大学附属小） 地域の中にある多様性に目を向ける授業
－絵本を活用した家庭科における実践－
- ④ 香田健治（関西福祉科学大学）・箱根正斉（西宮市立北六甲台小） 協働的な学習評価としてのモデレー
ション法 －総合的な学習における児童の振り返りを通して－

【自由研究発表 3】 司会：大谷敦司（山形市教育委員会）・伊藤慎悟（上智大学）

- ① 大谷敦司（山形市教育委員会） MP 学習（単元内自由進度学習）が広げる子どもの学びを考える
－子どもへのアンケートと教師の見取りから－

- ② 村上剛志（江戸川区立葛西小）
齊藤 勝（帝京平成大学）
個別最適な学びを促す教師の役割変革
－学級集団の状態に着目して－

教師の役割変革に向けて→



- ③ 青木靖（鹿沼市立板荷中） 反転授業と類似の授業展開の社会科授業の考察
- ④ 知久麻衣（学びの個性尊重プロジェクト） 家庭で実践できる拡充三つ組モデル・おうち SEM の
事例紹介 －「好き」で学びのオーナーシップを育む－
- ⑤ 伊藤慎悟（上智大学）・佐野亮子（東京学芸大学）・橋本都子（千葉工業大学）
かけ算九九を自発的に学ぶための環境整備

シンポジウム：子どもを主語にする学校づくり

コーディネータ 奈須正裕（上智大学）
シンポジスト 伏木久始（信州大学）
荒田修一（富山市立堀川小）
阪本一英（奈良女子大附属小）

大会最後のシンポジウムでは、コーディネータの奈須正裕先生を中心に、3名の先生から、「子どもを主語にする学校づくり」とは、どのような理念や考えに基づき、どのような教師や教師集団、環境によって支えられているのか、「個の追究と協働的な学び」とはどういう姿をいうのかについて、実際の子どもの姿、学校経営からお話を頂いた。

奈須先生から、奈良女子大附属小、富山市立堀川小は、「子どもを中心にする学校」として日本を代表する2校であるとし、その歴史と実践の概要が紹介された。両校は、共に重松鷹泰先生のご指導をうけた学校でもある。以下、3人の先生の提言と参加者との意見交換である。

伏木久始先生（信州大学）

まず、ご自身の重松鷹泰先生との出会いを話された。奈良女子大附属小、堀川小の実践は、重松先生の「自分で追究して知識を形成していく力を伸ばす、根底にある考える力、追究する力を育成すること」という考えに基づいていること。特に、「自律的学習を指導し、他者との関わりの中で自他を認めて伸びていく確かな個を育てている」実践であると紹介された。

また、ご自身が関わっている、長野県須坂市立の豊洲小、木曽町立福島小の自由進度学習の紹介もされた。豊洲小の自由進度学習では学習を終えた後、子どもたちから、①自分でしっかり考えられる②自分でやり方を考えられていい③やり方を考えられるようになったなどの感想が出されたとのこと。教師側からも、①学びの主導権を子どもに渡すことの不安や、②教えることが教師の責任を疑うことの

違和感などがあったが、「そろえることを重視せず一人一人の違いを認め、子どもの力を信じる」ようになったとのことである。

「子どもを主語」にする際の教師の役割として（1）その子なりの追究に寄り添いその子の文脈に歩み寄って学びの事実を読み取る努力をし続けること。（2）学習内容や方法を指示する前に、その子がどうしたいのか、願うのかを問う「聞き役」を担うことを挙げられた。

阪本一英先生（奈良女子大学附属小）

奈良女子大附属小は、伝統的に「自律的な学びを育む」ことを大切にしている学校であるが、そのことが、今も変わらなく受け継がれているという。

それは、「自律的な生活者を育もうとするしくみ」であるという。そのしくみの具体例として、「朝の会の元気しらべ」と「自由研究発表」の二つを挙げられた。

「朝の会の元気しらべ」とは、毎朝の健康調べ

の際に、子どもが「はい！」と返事をするだけにとどまらず、何か「自分について」を発表することである。一人の子どもの発表に対し、子ども同士の問答が面白いという。

「自由研究発表」は、発表してこそその自由研究発表と捉え、①発表するための準備、②家で事前練習（保護者が手伝ってもよい）、③おたずね問答の作成などを十分にさせて発表させることである。

この二つの取り組みは、奈良女子大附属小の「自分の生活を見つめ、自分らしさを感じ取り、自分らしさを主張したくなるしくみ」のものであるという。

荒田修一先生（富山市立堀川小）

最初に、「15年ぶりで堀川小に帰ってきたが、『堀川の子どもらしさ』が随所にみられ、うれしかった」という話をされた。

堀川小は、学年を越えた「朝活動の時間」がある。「朝活動」とは、子どもたちが身の回りの環境から、課題を見つけ主体的にはたらきかける活動である。現在も子どもたちが校庭の隙間に花壇を作ったり、生き物を育てる小屋（柵）を作ったり、「校長先生が持っている耕運機」借りて畑を作ったりしているという。こうした姿は15年前と変わらないという。

また、堀川小には、自分たちの生活の中から、自分の感じたこと考えたことなどをお互

いに出し、聞き合う「くらしの時間」がある。この「くらしの時間」の記憶は卒業生の生活にも生かされているというお話もあった。

先輩の先生から教わったこととして、堀川小の教育目標は「自主創造」であるが、自主創造を教えるのではなく、その子の中における「自主創造」を見つけていくのが我々の仕事ではないだろうかという話が紹介された。

意見交換（オンライン）

後半は、参観者が参加して、本音で質問や意見の交流がされた。

「教師として、教えた！という満足感ある。これは教師側の承認欲求ではないか」「個人追究をじっくりやらせているのに、最後の5分でふりかえりプリントを配ってまとめてしまう」「研究授業では、参観者自体に、子どもの追究を見ていけるセンスが必要ではないか」など様々な意見が出された。

伏木先生の「個性化教育を進めていく中で、私たちは、経済界に刈りとられない、自分らしくという確信を持つと同時に、「他者を尊重する大切さを学びとり、それぞれのよさを皆で理解しあいながら自分を追究していく」、そういうことが個性化教育の目的になりいといけないという言葉が印象的だった。

（文責・千葉・加藤）



事務局への問い合わせ・連絡先

庶務部長 佐久間茂和

〒362-0064 埼玉県上尾市小藪谷 77-1 3-28-502

TEL 080-5429-1681

E-mail sakuma.shigekazu@jcom.zaq.ne.jp

日本個性化教育学会ホームページ <http://koseika.com>

日本個性化教育学会報 第38号

2022年9月25日発行

編集責任者 事務局長 奈須正裕

編集 中澤米子

2021 年度 日本個性化教育学会 会計報告

2022 年 8 月 7 日(2022 年 3 月 31 日)

【収入の部】

項 目	予 算	決 算	備 考
会 費			
個人会費	400,000	568,000	4000 円×142
団体会費	7,000	7,000	7000 円×1
繰越金	377,647	377,647	前年度繰越金
預金利子	0	9	銀行利息
研修会参加費	300,000	582,235	全国大会・春季研参加費
学会誌掲載協力金	30,000	30,000	学会誌掲載協力金
合 計	1,114,647	1,564,891	

【支出の部】

項 目	予 算	決 算	備 考
事 業 費			
全国大会運営費	100,000	190,960	謝礼金・返金・手数料
春季研究会運営費	100,000	26,250	謝礼金・返金・手数料
学会誌刊行費	500,000	434,580	会誌編集印刷・編集通信費
広告活動費	150,000	136,388	会誌・会報発送・HP 運営費
事 務 費			
郵送・通信費	50,000	22,060	国際郵便・ハガキ代等
消耗品費	50,000	16,501	封筒印刷・ラベル等
諸費	164,647	13,654	慶弔費・返金・手数料
合 計	1,114,647	840,393	

○【差し引き残高】1,564,891－840,393=724,498

上記の通り決算報告いたします

会長 加藤幸次 事務局長 奈須正裕 会計部長 五十子晴美

以上相違ないことを報告いたします

会計監査 中澤米子 松本和平 (印章略・・・監査承認ハガキを受理しています)

2022 年度 日本個性化教育学会 会計予算案

2022 年 8 月 7 日

【収入の部】

項 目	内 訳	予 算
会 費		
個人会費	4000 円×100	400,000
団体会費	7000 円× 1	7,000
前年度繰越金		724,498
会誌論文投稿料		30,000
研修参加費		500,000
合計		1,661,498

【支出の部】

項 目	内 訳	予 算
事 業 費		
全国大会運営費	夏の大会の運営	200,000
春季研究会運営費	会場費・発表者交通費等	50,000
学会誌刊行費	学会誌編集印刷・編集通信費等	500,000
広報活動費	会報発送・ホームページ運営	200,000
事 務 費		
郵送・通信費	連絡通信費	100,000
消耗品費	印刷・文具費	100,000
諸費	弔電・手数料・予備費	511,498
合計		1,661,498

会長 加藤幸次 事務局長 奈須正裕 会計部長 五十子晴美